
i f

桜木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

if

【Nコード】

N8169Q

【作者名】

桜木

【あらすじ】

時は十八世紀末。フランスの動乱の時代を王太子、王女、そのメイドは何を想い生きたのだろう。そして、彼らは銘々ある決断を下す。

>この作品はフランス革命を題材としていますが、私の勝手な解釈、捏造を含んでいます。ご了承ください！<

1 - 1 桜

満開に桜が咲き誇っている。風がふわりと吹いて花弁が舞い、世界が薄桃色に染まった。一斉に咲いた桜の木はまるで何かにせかされていくかのようで、それが何かは分からないのに生き急いでいるかのように見えた。四角く切り取られた遠い遠い異国の世界の情景を、彼はつかれたかのように見ていた。

よく晴れた昼下がり。ルイ・シャルルは自室の窓辺にもたれかかりながら、ひとり静かに読書をしていた。

窓から差し込む光は穏やかで温かく、爽やかな風がそよそよと吹いている。緩やかな時間がシャルルを取り巻き、彼は心置きなく読書を楽しんでいた。

普段シャルルが読む本は政治や経済についての本が多い。だが今日は今まで手をつけたことがない分野の本を読んでいた。外国の文化についてだ。あまり興味がなく手に取ったことがなかったが、読んでみると意外とおもしろく、シャルルはすっかり没頭していた。

ふとシャルルがページをめくる手をとめ、すぐそばにある窓から外に目を向ける。見慣れた景色をぼんやり見つめながらシャルルは、はるか遠い国に思いを馳せた。

——日本という国は変わった国だな

この本に日本という東洋の小さな島国の文化が記してある。日本では毎年、春と呼ばれる暖かい季節になると桜という木の花が咲くらしい。凍てつくような寒い時期を過ぎた蕾は一斉に開花し、無数の小さな薄桃色の花が咲かせる。列になって咲いた桜の木は美しく、日本人はそれをたいへん愛でるのだ。桜を存分に楽しむため、日本人は花見という宴をあちこちで開き桜の木を堪能する。

だが桜の美しさは短命で、ほんの少しすれば瞬く間に花弁は全て散ってしまう。桜の花びらが風によって散ることを桜吹雪といい、それはそれで美しいらしいのだが。

——僕には理解できないな

日本人が桜を愛する理由がシャルルはいまひとつ分からなかった。僕たちの美しさの基準は豪華さだとか永續するものとかだ。僕が住むヴェルサイユ宮殿や貴族たちの服装を見ればそう言わざるをえない。もつと華やかさを、もつと末永くと貴族は願い、自分の沽券と地位のため美しさを追求するのだ。

日本が愛する桜は、シャルルの国フランスでの美の基準にどちらも当てはまらない。儂くて、装飾もなにもされていない樹木など地味だ。彼らはなぜあれほど桜にこだわるのだろうかとシャルルは見たこともないその花を不思議に思うと同時に、強く心惹かれた。

——一度見てみたいな

この目で桜を見てみれば、その素晴らしさが理解できるのだろうか。固定概念から開放され、心打たれるのだろうか。彼はぼんやりとそう思った。

シャルルは顔を上げまるで目の前に桜があるかのように宙を見つめる。手を伸ばすと、散る花びらを捕まえるように掌を軽く握りこんだ。

誰もいない自分だけの空間でこうして何かを思い巡らす時間がシャルルは好きだった。次期君主への周りからの重圧は日に日に増し続け、シャルルを当惑させる。そんなとき彼を解放してくれるのが無数の本たちと、そこから広がる世界へと入り込むことなのだ。

シャルルが再び本の世界に戻ろうと目を落とした直後、食器が大量に割れる音とメイドのものらしき悲鳴が響き渡る。シャルルは別段驚く様子もなく、またかというように微笑する。

——しょうがないな

多分またレアが姉の食器を片すとき何かに躓いたのだろう。そしてそのまま派手に落として全部割ってしまう。自分のお気に入りの食器を割られて、姉はレアをこっぴどく叱る……そんな様子が現場を見ずとも僕の眼前に広がった。レアというのはもうここで何年も働いているメイドなのだけれど仕事の要領は悪いし、ドジだし、気

はきかないしで皆から煙たがれている。とくに僕の姉、マリー・テレーズはレアのことを疎んでいて事あるごとに突っかかっている。

テレーズは今頃、目をつりあげてレアを怒鳴りつけているのだろう。それを仲介するためシャルルは自室を後にして、テレーズたちのいる一階へと階段を下りていった。

1 - 2 ティータイム

マリー・テレーズは午後のティータイムが大好きなことで有名だ。お気に入りの繊細な食器たちで高級なお菓子と高級な紅茶を嗜むその時間を、テレーズは毎日心待ちにしている。だからもしその時間を他人が壊すことがあろうならテレーズの怒りを買い、使用人たちは路頭に迷うのだ。テレーズのその時間を何事もなく終わらせるために、毎日みな四苦八苦していた。

今日もいつもと変わらずテレーズのティータイムが始まる。周りには数人の使用人たちが取り巻いていて、彼女が紅茶を飲み終われば継ぎ足しを、お菓子がなくなれば追加をと忙しく給仕している。使用人たちはみな一樣にきびきびと動き、熟練さを窺えるがひとりだけ動きが鈍く要領の悪そうな小柄な少女がいた。ロベール・レアだ。俯きがちな視線ときつく結ばれた口元から、この高い仕事に慣れていないことがひしひしと伝わる。

——失敗しないように、上手くやらないと
自分のスカートをぎゅっと握り締め唇を固くむすぶ。

——今日は失敗しないようにしないと。テレーズさまのお食事が終わったら、お皿とカップを少しずつ運んで、厨房に持って行ってそれからテーブルクロスを変えて……

レアはこれからの仕事をイメージトレーニングし、なんとかテレーズの機嫌を損ねないようにしようとしていた。

紅茶を一口飲んだテレーズがふっと顔をあげ、彼女に命じる。

「もういいわ。下げて」

「はいっ」

上ずった声でレアは返事をし、カップと皿を一つずつ手にとってトレイに載せる。すべて載せ終わると慎重に持ち上げ厨房に向かって歩き始めた。

テレーズに背を向け歩き始めたところで、レアはほっと息をついた。

後はこれをそのまま運ぶだけ。慎重にいけば絶対大丈夫……大丈夫。彼女は自分に暗示をかけるように胸のうちでつぶやいて真剣に食器を運んでいた。だが、後方で聞こえたテレーズの冷やかな声に集中力が途切れ、足が止まる。

「これは今までと違う紅茶よね？」

「はい。新しく取り寄せたアールグレイです……お気に召しませんでしたか？」

テレーズのすぐ傍にいたメイドがおそろおそろ返答する。すっかりおびえきった彼女にテレーズは冷たく言い放った。

「全然だめ。前の紅茶と比べものにならないわ。質の悪い紅茶に代えたでしょう？」

「確かに質は少し落としました……でもほんの少しだけですし、お菓子と紅茶代に使えるお金もうほとんどありません」

「じゃあ、お父さまの金庫にあるお金を使えばいいでしょ」

「でっでも、あれはこの前みんなから国のために集めた大事なお金で」

「関係ないわ。私はおいしい紅茶が飲みたいの。いちいち口答えしないで。もういいわ、あなた明日から来なくていいから」

それまでおびえきっていたメイドが一転して動揺し、テレーズに詰め寄る。

「いままでのものに戻しますから。くびにしないでください」

「いやよ」

ぴしゃりと言いテレーズは背を向けた。そのまま自室に戻ろうとする彼女に、トレイを持ったまま状況を見ていた少女が後ろから声をかける。

「待ってください！」

テレーズは振り向くと声の主を確認する。それがレアだと分かる。と、テレーズの顔は疎ましげにゆがめられた。

「なに？レア」

「あの、辞めさせないであげてください。彼女弟たちの面倒みなく

ちやいけないし、仕事なくなっちゃうと生活していけないんです。だ、だからお願いします」

緊張のあまり声は上ずり、言葉はつかえてしまう。だが怯えて口をつぐんでしまうことはなく、懇願し頭を垂れた。しかしテレーズはレアを一瞥すると再び背を向け歩き始めた。

「テレーズさま！」

レアがテレーズのもとに駆け寄ろうと足を踏み出す。そばには机が置いてあり彼女はそれをよけて通らなければならなかった。だがくびを取り消してもらったことで頭がいっぱいだったレアはそれが置いてあることがまるで目に入っていなかった。机の脚に自分の足をひっかけバランスを崩す。

——転ぶ

そう思った時にはすでにレアの体は傾き、彼女は勢いよく転倒した。持ったままだったトレイから食器が落下し、乾いた音を立てて繊細な陶器が割れていく。さあっとレアの顔から血の気が引いた。どうなることかと遠巻きに見ていた使用人たちも、顔を真っ青にしている。

今までこちらに冷たい視線を送っているだけだったテレーズが早足でレアの方に歩み寄る。助け起こすためではなかった。

「ロベール・レア！あなた食器割るのこれで何回目？いいかげんにして」

「申し訳ございません。すぐに片付けます」

「片付ければいいって話じゃないわ。あなたももう明日から来なくて結構よ」

「くびになったら次に働くところがないんです。次は失敗しないようにしますから」

「もううんざりよ。何をやらせてもとろいし要領は悪いくせに、口答えだけは一人前にして。あなた見てるといらいらするのよ。だからもういらないわ」

何も言い返せずうつむいたレアの瞳にうつすらと涙が滲む。

「姉さん、言いすぎだよ」

声がした。澄んでいて柔らかく、聞くものの心を自然と奪うような綺麗な声が響く。ルイ・シャルルだ。緋色の絨毯を敷いた階段をゆっくりと下りてくる。

「シャルルには関係のないことでしょう」

きっとテレーズがシャルルを睨む。

「関係なくはないよ。レアが辞めたら僕はすごく困る。チェスの相手がなくなってしまう」

「相変わらず能天気ね。そんなんだから時期国王は威厳がないとか言われるのよ。使用人たちの味方のつもりかなんなのか知らないけど、奇麗事じゃ生きていけないわ」

「姉さん」

「なに？」

「気は済んだ？」

テレーズは言い返そうとして口を開いたが、弟のほんわかとした態度に毒気を抜かれたのか口を閉ざしてきびすを返した。

「もう、レアたちのことはいいよね？」

シャルルがテレーズの背に声をかける。彼女は何も言わずに場を立ち去った。

「シャルル、ありがとう」

「また、食器割ったの？しょうがないね、レアは」

「うん……」

レアがしゅんと落ち込む。

「あの、ありがとうございました」

危つく暇を出されそうになったメイドが深々とシャルルに頭を下げた。手をひらりと振ってシャルルが応じる。

「いいよ、いいよ、もう行きな」

もう一度深く頭を下げメイドは自分の持ち場へと帰って行った。ぱたぱたと軽やかな足音を立てて彼女が遠ざかっていく。

「優しいね？シャルル」

シャルルの顔を下から見上げながら、笑ってレアがちやかす。シャルルが呆れた視線をレアに投げかけた。

「さっきまで泣きそうになってた人がなに言ってるの」

「泣いてないよ！」

「泣いてはね。それよりレアはもう仕事終わった？」

「終わったよ」

「それじゃチェスやろうよ、レア」

1 - 3 チェス

喧騒とはかけ離れた静かなシャルルの部屋。シャルルとレアはチェス盤を挟んで向かい合って座る。二人は慣れた手つきでチェスの駒を動かしていく。意思を持たない無機質の駒たちは彼らの手によって滑らかに動き、まるで現実の人間社会を彷彿させた。王を守るために自分のことなどかまわず駒たちは動き回る。

「レアはさ、なんでわざわざああやって立てつくようなことするの？」

駒を動かしながらシャルルがまるで独り言のように呟いた。チェスを始めると無口になる彼だから、それはとても珍しいことだった。「いつもわざわざ面倒くさいこと背負い込んで。ある程度うまく立ち回らないと潰れるよ？姉さんじゃないけどさ」

シャルルの声はいつものように澄んでいたのだけれど、そこに柔らかさはなかった。例えるなら冬の湧き水だ。澄んでいて美しい。だが触れるなら刺すように冷たい。

なぜって、とレアは考える。

——だって、今まで一緒だったし

彼女は今まで一緒に仕事をしてきた仲間だった。深く会話をしたわけでも、親しい友人だったわけでもない。ただど家族を養うという同じ目的を持って共に働いてきた。何らかの結びつきはあった。だからテレーズが彼女をくびにすると言ったとき、私はそれを阻止したいと思った。その思いのままに行動した。それだけだった。

「辞めて欲しくないと思ったから。それだけ」

「レアのその真っ直ぐなところは長所でもあるけどさ、致命的な短所にもなりうるんだよ。例えば、レアがこのポーンだとする」

シャルルがレアの駒のポーンのひとつを、ひとマスずつ前に動かす。

「レアは目的、ここでは僕のキングを取るためにひたすら前に突き

進む。だけど、それしか見えていない。レアが一こまだけ動かしている間に僕のビショップ、ナイト、ルーク、クイーンは少しずつ、少しずつレアのキングを囲んでいく。キングが囲まれていることに気づいた頃にはすでにチェックメイトだ」

チェス盤の上のシャルルのビショップが、レアのキングを捕らえる。彼女のキングは周りをしっかりと彼の他の駒によって囲まれており、逃げ場はどこにもなかった。シャルルがビショップをレアのキングにこつんと当てる。キングはことりと乾いた音を立ててチェス盤上に転がった。

「ただひたすら真っ直ぐに進めばいいってもんじゃないんだ。周りをよく見て慎重に行動しないと。全体を見て、どこをどう進めれば上手くいくのかよく観察するんだよ」

レアが口を尖らせて不満を明らかにした。シャルルが動かした駒を元の位置に戻して、ゲームを再開する。

「じゃあ、シャルルは私にそうやってせこく生きろって言いたいのか？」

「別にそういう訳じゃないよ。それに僕はそういう生き方がせこいと思わないな」

「せこいよ。こそこそしてるというか、真っ直ぐじゃないというか」「正当法だけじゃだめなんだって」

「やっぱりせこいよ」

「レアがそう思うならそれでいいけど」

シャルルが軽く肩を竦める。

「ただ」

「ただ？」

「心配」

「……………」

「って言ったらうれしい？」

シャルルが視線を投げかける。

「ぜんっぜん」

「はい、チェックメイト」

いつの間にかシャルルは駒を上手く操り、レアのキングを捕らえていた。

「ちよつといつの間に」

「だから言ったのに。レアは一箇所しか見てないんだって」

レアはキングの逃げ道を必死で考えるが、綿密に考えられたシャルルの策から逃れる術はなくレアの負けは確定していた。

「また、負けか」

「レアって僕に勝ったこと一度もないよね」

不服を露にしてレアが頬を膨らます。シャルルにはチェスで一度も勝ったことがない。そしてこれからも勝てる気がしない。シャルルの戦略は緻密で隙がまるでなく、いつもあつという間に追い込まれている。悔しいという思いより、鮮やかだと感心してしまうことのほうが多かった。

「少しくらい手加減してくれてもいいのに」

「そんなのおもしろくないよ。本気でやらなきゃ」

シャルルが頬杖をついたままにっとなめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8169q/>

i f

2011年2月18日20時25分発行